【特別寄稿】

稲垣忠彦先生と信大国語教育学会

藤森　裕治

「藤森君、君の発表にはがっかりしたよ。」

あの日、M館四階では信大国語教育学会のささやかな打ち上げ会が催されていた。宴たけなわの頃、講演をしていただいた稲垣忠彦先生（前信濃教育会教育研究所長）にご挨拶をお願いした、その第一声が冒頭の言葉である。

当日、講演に先立ち、私は『更級日記』「上洛の旅」の構造分析について研究発表をしている。稲垣先生の「教師のライフコース研究」を、古典文学教材の分析手法に応用したものだった。けれどもこの発表は、教室に脚を運んで学びの真実に触れる稲垣先生の研究姿勢とは、まったく相容れないものだった。稲垣先生は、私の学位論文をまとめた『国語科授業研究の深層』（東洋館出版社）に感激され、「東大教員時代に、こういう論文を学生に書かせたかった」とまでおっしゃってくれていた。その同一人物が、講師として自分を招待した膝元の学会で、古典文学を素材に発表をしている。これがどれほど先生を当惑させたのか、想像に難くない。あまつさえ、私は「ライフコース研究がこういう方面にも活用できるんだねえ」と感心されることすら期待していたのである。

稲垣先生との親交はその後も続いた。信濃教育会の研修会に招待され、福井大の松木健一氏と二人で講演をしたり、教育研究所研修生に選ばれた県内の先生方と一緒に、読書会を開いたりした。先生と二人で呑むことも、一度ならずあった。

稲垣先生の訃報が突然とどいたのは、あの学会から二年後である。検査入院されたときは、すでに末期の胃がんだったと聞いた。最後に会食した居酒屋で、「最近胃もたれがしてねえ」とおっしゃっていたことを思い出す。

信大教員として最後となる二〇一九年の信大国語教育学会で、私は再び研究発表の場をいただいた。タイトルは「予測不可能事象」、中身は自分自身のライフコースを紹介するものだった。既に鬼籍に入られて十年を数える稲垣先生への、遅きに失した追悼発表である。

（ふじもり　ゆうじ　文教大学）